

e-ビーフNEWS 北の牧場から

April 2022

月刊情報誌
No.100発行
特定NPO環境リサイクル肉牛協議会
〒080-0351
北海道河東郡喜望峯町字然別
北5線西25番地2
FAX 0155-40-7301

十勝の早春

朝のマイナスがなくなり日中は10℃超えのポカポカ陽気に。まだ白肌に見える日高からふきおろす風が冷たくブルブル。5時前から明るくなり十勝特有の夜明けの青空が広がります。鳥たちが一斉に騒がしくなり、ハクチョウたちがグワークワー呼びあいながら通り過ぎてゆきます。あれだけあったドカ雪の後遺症もスーッと消え、畑は黄土色に戻ってきました。それでもうっすらと緑の色合いをのぞかせ始めました。間もなく道端の暖かいところからフキノトウが顔をのぞかせるでしょう牧場のパドックの陰には、まだまだ雪が凍って残っています。これがあるうちは水が抜けないでグチャグチャ。しばし放牧中止せざる負えないでしょう。ポカポカした日を浴びてジューッとしている牛たちのフワフワした冬の外套(冬毛)も抜け落ちてきました。

今回でe-ビーフNEWS北の牧場からも100号になりました。これからもいろいろな情報や牧場の牛たちの様子をお伝えしますのでよろしくお願いいたします。



活動のお知らせ

- 3/26(土) モニター参加 日本産肉研究会第29回学術集会 テーマ「持続可能な畜産とは何か？」
- 6/11(土) 第23回総会&飼養技術研修会 場所:新得町 北海道畜産試験場 3階大会議室
 ・e-ビーフ牧場(北の牧場舎)の飼養・肉質分析…日本獣医生命科学大 動物栄養学教室 柴田昌宏教授
 ・畜産試験場 糟谷氏 黒毛和牛ハイモイスチャーシェルコーン給与法
- 11/10(木) 第19回資源循環型肉牛生産シンポジウム2022 13:00～ とかちプラザ2階 視聴覚室

NEWSばか読み

- 輸入飼料高騰で自給飼料の生産拡大機運高まる2/28:安全保障
- 全国黒毛子牛取引 増体重視傾向で北海道市場が上位ランク
3/1:良さが出た
- 中央酪農会議 需給緩和で乳牛早期更新奨励3/3:バランス調整
- 農林水産省 農地取得の下限廃止で農地改正案3/4:多様化推進
- 21年ホテル稼働率が過去最低の35%3/4:まだまだ回復に時間がかかる
- 山口県 耕畜連携で子実コーンを地産地消 真の山口県産畜産物を
3/5:この輪が必要
- JA音更 ブロッコリーの加工用産地化で直播法を実施
3/8:コスト低減は必須
- 原油 供給不安で急騰3/8:資源高が浸透
- 豪州 東部地区の洪水で農地被害が深刻3/9:ジワリ影響加算
- 小麦政府売り渡し価格が17%値上げ13年ぶりに高水準
3/10:政府がなんで上げる必要があるのかな
- 中国全代 食料資源の自給自足体制を目指す
3/10:しっかりした方針が影響
- Jミルク 乳製品在庫削減に飼料用転換や輸入置換で基金3/11:調整機能
- 鶏卵最大手イセ食品が会社更生法手続き開始全国の1割1,300万羽
3/12:いろんな影響
- 日本食肉センター調査 コロナ前より家庭内食肉需要ミールキットが好調
3/15:簡便
- パルシステム 穀物飼料国産100%卵販売を開始
3/16:この傾向が増えれば

- 財務省 2月貿易統計 輸入食料品29%増6000億円食肉30%増
3/17:増えている
- 飛騨牛ミート カット肉で海外向け需要増加傾向
3/17:実需者向け使いやすく
- 金融庁 企業情報開示に生物資源保護の取組みを追加
3/17:国際的に要求
- 22年度 米粉用コメが5年間で1.7倍 輸入小麦代替で増加
3/19:コメ需要低迷打開策
- 22年農林水産省予算 環境配慮やデジタル化にシフト
3/22:ポイントが明らかに
- 秋田大潟村 米価下落で税収が大幅減3/22:地域経済に影木
- 全農配合飼料 4-6月最高値4350円値上げ3/23:どこまで行くの
- 輸入果実減 物流混乱や円安で国産引き合い3/24:回帰になれば
- 建設コスト急騰ビル用鋼材13年ぶり水準 ロシア発資源高
3/24:すべてに波及
- 米国牛肉に新セーフガード適用3/25:いよいよ解釈
- ホクレン乳価 全用途に据え置き 飲料121円3/25:コスト吸収出来るか
- タマネギの高騰続く 北海道産不作と輸入供給不安定
3/28:供給源に不安
- 1月配合飼料価格が、83千円過去最高3/28:これで生産できるの
- ドイツ電力 石炭火力に回帰 脱炭素先送り3/29:原子力には戻らず
- クリーンエネ海洋温度差発電に商船三井が実用化に
3/30:どこでも再エネ
- 米国 輸入低減枠オーバーで関税上げ3/30:輸出に影響
- AWF協会 日本産牛肉の肉牛認証制度を創設3/31:まずは一歩

東京直近NEWS (3/29 Shi-REPORT)

ホルス

ホルス相場上げ基調での推移。
「まん防」解除から外食、加工原料用と問合せは増加。
量販向けパーツ、上位部位は鈍いが切落し原料は引合増。
輸入アイテムの高騰と不足傾向からパーツ全般問合せ増も、ホルスの慢性的頭数減少傾向から供給は増えておらず対応しきれない状況。
4月以降GWへ向けて焼き材バラ関係の不足感が加速しており、問い合わせは増えてきそう。
コロナ感染状況も落ち着きから若干再拡大の兆しあり、状況が読みづらい。

経産牛

経産牛相場、パーツグレードは一定維持もガリ枝はやや上げ基調にシフトか。
販売状況は「まん防」解除時期と輸入牛の不足感が増えてきており、引き合いは上昇。
特に赤身ポーション、スライス原料のモモ、カタロースの問合せは増加。
ヒレは完全に復活状況で欠品状況。
販売が復活した訳ではなく、輸入牛の不足から代替需要の要素が大きい。
特にヒレ、バラ、赤身ポーションの荷動きが盛ん。
挽き材についても、輸入原料の高騰から国産と値差がなくなりつつあり、3月上旬までは荷余り感強く価格競争の情報も多かったが、4月以降は在庫も各社適正に戻り価格も維持してきている。

1.畜産技術802号(2022.3)

1)研究レポート(1) 和牛肉における脂肪質と食味性の関係-1
(入江正和、家改セ)

食肉の「おいしさ」は消費者の嗜好性を示し「食味性」は専門家の評価で客観性を持たせた食肉の特性です。和牛肉では脂肪交雑の改良が進み、次の肉質項目は食味性に影響する脂肪の質とされています。脂肪の質はグラスフェッド牛ではリノレン酸、グレインフェッド牛ではリノール酸やオレイン酸の多い脂肪が形成されます。最近の研究では遊離脂肪酸が甘味を呈するとされ、和牛肉の構成脂肪酸は他の牛の脂肪酸と異なり飽和脂肪酸が少なく一価不飽和脂肪酸が多く融点が低い特徴があります、和牛は脂肪酸生合成が活発で遺伝的に、飽和脂肪酸から一価不飽和脂肪酸への転換が多くなるためと理解されています。

2)技術情報(2)北海道におけるフルスタイン種経産牛再肥の取り組み
(松原夏月、(株)ニチレイフレッシュ)

北海道のホルスタイン種雌牛の更新は早期化し平均産子数は2.6産(3歳10月)です、これら経産牛を牛肉資源として肉用牛の生産基盤強化のためにホルスタイン種経産牛再肥育の課題を検討しました。成績不良で導入2ヵ月未満で肥育離脱の淘汰牛や4ヵ月以上の再肥育達成牛などがありますが、肥育牛の増体成績は前期(肥育開始1-2ヵ月)の成績に影響され、肥育開始時の濃厚飼料多給への適応が鍵です。今後、地域の未利用副産物などで飼料コストの低減を図ることが課題です。

3)用語解説、新細かさ指数(口田圭吾、帯畜大)

新細かさ指数は画像解析技法でロース芯断面内の脂肪交雑の周囲長を芯面積の平方根で除した値です。小ザシを評価できる熟練した格

付け員の評価値と新細かさ指数との順位相関係数は0.925以上と高く、この指数が小ザシ判定に有効で、この指数の遺伝率は0.62あり、小ザシの育種改良が画像解析により可能と思われました。

4)海外統計DATA(2022.1.12)世界の2022年食肉需給の見通し(米国農務省)

2022年の世界の牛肉生産量は5,820万tでやや増との見通しです。ブラジルでのBSE発生で停止していた中国の輸入再開、豪州の生産増がEUや中国の生産減を補完し、世界全体ではやや増の予想。牛肉の貿易量は、EU、日本輸出減、アルゼンチン、豪州、ブラジルで輸出増。世界全体の輸入量は横ばいで、輸出量は1,200万tの見込みです。

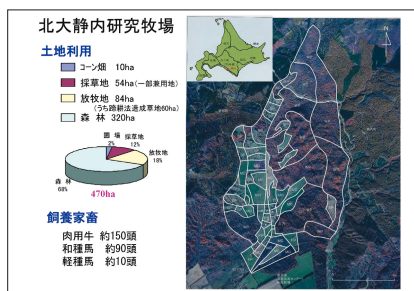
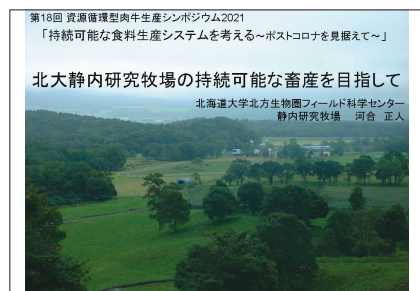
2.肉用牛研究会報112号(2022.2) ※2)、3)は次号に掲載します。

1)黒毛和種去勢肥育牛に対するコバルト補給が飼料摂取量、体重増加ビタミンB12バイオマーカーに及ぼす効果(築谷愛未他、京大)

コバルト(Co)はVtB12の構成成分で飼料中のCo含量が反芻胃内微生物のVtB12の合成制限要因です。23ヵ月齢の黒毛和種去勢牛に硫酸Co製剤(Co1.66mg/日)を配合飼料と共に3ヵ月間補給しました。補給前の稲わらを含めた給与飼料中のCo含量は肉用牛の日本飼養標準要求量の下限値を超えていましたが適正値以下でした。Co製剤の補給により血漿メチルマロン酸濃度が低下し、VtB12の栄養状態が回復し、飼料摂取量と日増体量が増加しました。

資源循環型肉牛生産シンポジウム 2021

話題提供1.(生産者)「北大静内研究牧場の持続可能な畜産を目指して」2回シリーズ①回 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター 耕地圏ステーション 静内研究牧場 牧場長 持続的生物生産領域 生物生産体系分野 准教授 河合 正人氏



沿革

1950(S25)年4月 大蔵省から現在本牧場に隣接する農林省新設畜産牧場(現独立行政法人畜産改良センター新設牧場)より、北海道和種馬を含む林牧馬(いわゆる山馬)約80頭および林間放牧地の所管換えを受け、**北海道大学農学部附属畜産牧場**として発足した。
5月 農林省からの出向職員が21日より業務開始(創立記念日)する。

1951(S26)年8月 大蔵省より正式に土地・建物等の所管換えを受ける。

1953(S28)年8月 大学設置法の改正、**北海道大学農学部附属畜産牧場**として官制化。

1963(S38)年11月 農林省からさらに土地約35haの所管換えを受け、現在470haの土地を有するに至る。これを機にその後肉用牛を導入、**離陸法**により放牧用草地を造成、粗飼料の生産基盤を確立した。

2001(H13)年4月 **理学院附属臨海実験所、同海産研究施設、農学部附属植物園、同農場、同演習林、同牧場、水産学部附属湖沼臨海実験所、同日流水産実験所、七飯養魚実習施設及び学内共同利用施設**、**臨海実験所を統合して学内共同教育研究施設「北方生物圏フィールド科学センター」が設置され、北海道大学北方生物圏フィールド科学センター静内研究牧場となる。**



離陸法による草地造成(1965年から4年間)

造成地: 御料牧場時代から50年以上にわたり林牧馬の放牧に供されてきた広葉樹(ハンノキ、ニレ、イタヤカエデなど約600本/ha)を主体とする自然林55.1ha
(1965年10.1ha、'66年13.0ha、'67年10.4ha、'68年21.6ha)
林床植物: ミヤコザサ、ミツバ、カリガネソウなど30種以上が混生
植斜度: 5~10度が面積的には多く、35度前後の急傾斜地も存在

離陸法による造成作業工程

- 障害物除去: 放牧家畜のひ陰林として5本程度/haの立木を残し、その他はすべて立木のまま売却した。小雑木は刈り払って焼却し、木の根株はそのまま残した。
- 土壌改良資材散布: 土質調査を行ない、炭酸カルシウム4.5t/haと腐成リン肥0.2t/haを植斜地には人力散布、平坦地には機械散布した。
- 肥料散布: 基肥として草地用複合化成肥料(6-11-11)450g/haを、土壌改良資材と同時に同一要領で人力および機械散布した。
- 牧柵設置: '65年造成分は1牧区1.0ha、その後は約7haとして設置した。木柵は造成地内の立木から作成、間隔は2.5mとして有刺鉄線を3段張りとした。



転載・再利用は固くお断りします